

特別支援教育に関する資質向上に関する研究

— 松本文庫の紹介 —

太田容次

清水聖子（京都ノートルダム女子大学）

<概要>

京都ノートルダム女子大学では、特別支援教育に関する専門性を兼ね備えた教員等養成を行っており、この度松本文庫を開設し広く公開できるよう設置した。本稿ではその概要を紹介し、特別支援教育に関する資質向上について考察する。

<キーワード>特別支援教育, アシスティブ・テクノロジー, ICT,

1. 松本文庫設置の背景と経緯（太田）

京都ノートルダム女子大学では、2017年度のこども教育学科設置以来、特別支援教育に関する専門性を兼ね備えた教員・保育士の養成を行っている。これは、文部科学省（2007）により特別支援教育の推進について、その理念や具体的な方策等が通知され、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校等の初等・中等教育機関等において、「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」^[1]との理念に基づき、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応できる教員等の養成を目指すものであると考えている。

また、文部科学省（2019）は特別支援学校学習指導要領の改定のポイント^[2]として、教育内容等の主な改善事項として、以下の3点をあげている。

- ・ 学びの連続性を重視した対応
- ・ 一人一人に応じた指導の充実
- ・ 自立と社会参加に向けた教育の充実

特に、“一人一人に応じた指導の充実”の中で、「視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者及び病弱者である子供に対する教育を行う特別支援学校において、子供の障害の状態や特性等を十分考慮し、育成を目指す資質・能力を育むため、**障害の特性等に応じた指導上の配慮を充実**するとともに、**コンピュータ等の情報機器（ICT機器）の活用等**について規定。」と示し、さらに「発達障害を含む多様な障害に応じた指導を充実するため、自立活動の内容として、『障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること』などを規定。」と述べており、一人一人に応じた指導を充実させることで、障害等により様々な活動や社会への参加が制約されるのではなく、適切な指導及び必要な支援により一層の“自立と社会参加に向けた教育の充実”が求められているとのことである。

さらに、文部科学省（2022）による通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒

に関する調査結果（令和4年）^[3]においては、「学級担任等が回答した内容から、『知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す』とされた児童生徒」は、小・中学校で推定値8.8%（前回H24調査6.5%）、高等学校で2.2%（前回H24高等学校の調査未実施）と報告されている。

2022年度に設置した松本文庫は、こうした特別支援教育の状況の中で、特別支援教育の理念や現行の学習指導要領に先駆けて、特別支援学校（当時の養護学校）において肢体不自由児を中心に教鞭をとられた後、国立特殊教育総合研究所（当時）教育学研究部教育学研究室長等を歴任された松本廣氏より本学特別支援教育研究室に寄贈いただいた貴重な書籍や資料である。本稿では、松本文庫の概要を紹介し、特別支援教育に関する資質向上について考察したい。



図1 松本文庫の書棚

2. 松本文庫所蔵書籍・資料の分類について（清水）

今回整理した資料は総数468件、内訳は和書323件、洋書145件である。和書は日本十進分類法（NDC）、洋書はアメリカ議会図書館分類表（LCC）に基づいて分類した。

まず和書について、分類としては情報学、心理学、社会福祉、教育、医学、情報工学などがあり、社会福祉（107件）、教育（181件）分野が中心となる。発行年は1976年から2007年までと約30年にわたり、1990年代（166件）が最も多く、2000年代（83件）、1980年代（66件）と続く。内容は教育とインターネット、教育とコンピュータ、特別支援教育、教育学が目立つ。特徴としては、リハ工学カンファレンスや日本教育工学会全国大会の講演論文集、プログラムなどの学会資料がある一方で、北海道教育大学旭川分校物理学教室、群馬県立二葉養護学校などの小規模な研究会や研修グループが作成した資料や埼玉県立熊谷養護学校、東京都立小平養護学校、東京都立村山養護学校の学校要覧などもそなえていることである。

検索キーワード（件名）

電子計算機と教育 / 福祉機器 / 障害児教育 / 特別支援教育 / 肢体不自由者 /
コミュニケーション / コンピュータ教育 / 教育学 / 情報アクセシビリティ

次に洋書について、言語としては英語（128件）、ドイツ語（16件）、ノルウェー語（1件）、分類は社会病理学・社会福祉、教育、コンピュータサイエンス、医学、テクノロジーなどがあり、社会病理学・社会福祉（50件）、教育（39件）、医学（24件）分野が中心となっている。発行年は1976年から2000年までで、1990年代（109件）が突出している。内容はコンピュータと障害者、障害者用自助具、障害者のためのコミュニケーション支援、障害者用通信機器、特殊教育が主たるところである。University of Wisconsin-MadisonのTrace Research & Development Centerが発行するTrace reprint series（41件）が多くそなわっていることが特徴と言える。Trace reprint seriesは書籍や学術雑誌、学術大会で発表された論文などを抜き刷りのような形で発行しており、なかには学術雑誌に掲載された多数の論文から参考文献のみを集めたものもある。また1990年代の福祉機器、主にコミュニケーションエイドのカタログ（12件）なども見られる。

検索キーワード（Subjects）

Computers and people with disabilities / Communication Aids for Disabled / People with disabilities – Means of communication / Communication devices for people with disabilities / Communicative disorders in children / Children with disabilities – Education / Self-help devices for people with disabilities

3. 松本文庫の書籍・資料の概要（太田）

松本文庫に寄贈された書籍等の概要は2に示すとおりであり、ここでは、資料整理を行う上で分類したカテゴリごとに、筆者が着目した書籍等の概要を紹介したい。

(1) 教育工学

本カテゴリでは、日本教育工学会雑誌や全国大会講演論文集、さらに、聴覚障害教育工学（日本聴覚障害・教育工学研究会）創刊号1982 Vol.1～1991 Vol.15が納められている。

聴覚障害教育工学 Vol.1の巻頭言では、障害児教育や感覚代行技術の専門家の両方からの教育の提案や工学系の会員の協力が提案されている。これは関係者の連携など現在も変わらず重視されている点であろう。

また、坂元昂（1991）教育工学放送大学教材、放送大学教育振興会といった教科書や日本教育工学振興会編（1989）新教育機器利用に関する調査研究報告書：昭和63年度研究開発事業といった昭和時代の近年では聞き慣れない新教育機器利用といった言葉による報告書もあり、興味深い。こちらでは、コンピュータ利用の意義と教員研修について資格制度も含め報告されている。



図2 教育工学関連資料の一部

(2) 重度・重複

本カテゴリでは、重度障害に関する資料と重複障害に関する資料が見られる。

計測自動制御学会ヒューマン・インタフェース部会編（1985）「第1回ヒューマン・インタフェース・シンポジウム論文集」といった資料や山梨県立あけぼの養護学校タイプ指導研究部（1976）電動和文タイプライター：「本校における実践」といった資料も見られる。特に、電動和文タイプライターは筆者が初任の頃に事務室の事務機器としての存在は認識しているが、こちらの資料では肢体不自由児による書字と電動和文タイプライターを使用した学習の必要性和重度・中度・軽度・上肢障害なしの児童生徒への実践を具体的に紹介し、さらにはその意義を国語科や漢字学習、英語科における学習、さらには重度・重複化に対する具体的な対策として述べられている。こうした研究的な視点による実践が現在の肢体不自由教育につながっているのではないかと考える。

また、小島純郎、塩谷治編（1988）、ゆびで聴く：盲ろう青年福島智君の記録シリーズ市民の活動、松籟社では、現在バリアフリー研究者として活躍されている視覚と聴覚の重複障害ある子供の記録も

あり興味深い。

さらに、松本廣（1983）、重度・重複障害児におけるコミュニケーション活動の拡大をめざして：電光表示機を使用したひらがな文字による発信行動への導入といった松本廣氏による私製の資料もあり、自身の実践研究をまとめられた資料で興味深い。

(3) 肢体不自由

本カテゴリでは、肢体不自由をキーワードにした研究報告書が多い。

竹井機器工業（株）（1991）、目でうつワープロ：まばたきによるコミュニケーションを実現：意思伝達 / 文章作成 / プリントアウト / 周辺機器の制御

では、当時の技術によるまばたきによるワープロ入力について述べられている。現在も視線入力によるコミュニケーション支援に関する研究が行われていることから、このころからこうしたニーズに応じた研究開発が行われていることがわかる。

- ・山下皓三（1987）、肢体不自由児・者用ワードプロセッサおよびその指導プログラム開発に関する研究科学研究費補助金（試験研究（1））研究成果報告書，国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部
- ・心身障害児教育財団（1991）、肢体不自由教育におけるパーソナルコンピュータの活用に関する研究
- ・塩谷朗（1992）、ハイパーカード用入力装置の開発とその利用：上肢運動機能障害児への表出援助，国立特殊教育総合研究所長期研修成果報告書，国立特殊教育総合研究所
- ・日本リハビリテーション工学協会 Special Interest Group「姿勢保持」編（1992，1993），姿勢保持研究 SIG「姿勢保持」資料集，日本リハビリテーション工学協会
- ・心身障害児教育財団，（1989），ワードプロセッサの肢体不自由教育への導入とその指導，新居泰司（1992），進行性筋ジストロフィー症児のコンピュータ操作環境改善のためのキーボード・マウスエミュレータの開発と実践，国立特殊教育総合研究所長期研修成果報告書，国立特殊教育総合研究所
- ・渡辺昇（1989），障害児のコンピュータ教育：肢体不自由児を中心として，渡辺昇
- ・江田裕介（1992），脳性まひ児の表現活動とその技術的援助：エレクトロニック・イコライザーとネットワーク環境の導入，福祉システム研究会

などのコンピュータを利用した肢体不自由のある子供を対象とした教育に関する研究報告書や国立特殊教育総合研究所長期研修成果報告書などがある。

また、書籍として、以下の資料がある。

- ・村田茂，脳性まひ児のための発達を促す指導のコツ，学苑社，1987
- ・全国肢体不自由養護学校長会編著，新たな課題に応えるための肢体不自由教育実践講座，ジアース教育新社，2002
- ・全国肢体不自由養護学校長会編著，特別支援教育に向けた新たな肢体不自由教育実践講座，ジアース教育新社，2005
- ・文部省，肢体不自由児のコミュニケーションの指導，日本肢体不自由児協会，1992

では、肢体不自由児教育における全国の先進的な教育実践を校長会で取りまとめたものや文部省（当時）による解説書やバリアフリーに関する最新情報の書籍が見られる。

(4) ユニバーサルデザイン

このカテゴリに分類した書籍・資料については、

- ・米国建築物および交通機関の障壁に関する改善命令委員会編 / 八藤後猛, 曾根原純訳, バリアフリーチェックリスト: 米国における建築物のアクセシビリティに関する最低基準, エンパワメント研究所, 筒井書房, 1996
 - ・古瀬敏編著, ユニバーサルデザインとはなにか: バリアフリーを超えて, 都市文化社, 1998
 - ・C&C 振興財団編 / アクセシビリティ研究会著, 情報アクセシビリティとユニバーサルデザイン: 誰もが情報にアクセスできる社会をめざして, アスキー, 2003
 - ・サンワコーポレーション編集, バリアフリーデザイン・ガイドブック: 必携実例でわかる福祉住環境: 高齢者の自立を支援する住環境デザイン, 2003年度版, 三和書籍, 2001
- などのバリアフリーやユニバーサルデザインに関する住環境や情報アクセシビリティ等に関する書籍がある。

(5) 心理学

このカテゴリに分類した書籍は、

- ・深谷昌志編著, 児童観: 子ども理解を深めるために 放送大学教材, 放送大学教育振興会, 1986
 - ・小谷津孝明, 星薫編著, 認知心理学放送大学教材, 放送大学教育振興会, 1992, 三澤義一編著, 運動障害の心理と指導, 日本文化科学社, 1993
 - ・今栄国晴編著, 教育の情報化と認知科学: 教育の方法と技術の革新, 福村出版, 1992
 - ・中野尚彦著, 障碍児心理学ものがたり: 小さな秩序系の記録, 明石書店, 2006
 - ・梅谷忠勇, 生川善雄, 堅田明義編著, 特別支援児の心理学: 理解と支援, 北大路書房, 2006
- などが分類され、指導・支援との関連からの資料となっている。

(6) リハビリ工学

このカテゴリに分類した書籍・資料については、日本リハビリテーション工学協会の協会誌であるリハビリテーション・エンジニアリングのVol.2 (1988) ~ 14 (1999) までの一部がある。その一部として、Vol.2No.2には、畠山卓朗、市川冽編集による環境制御装置 (Environmental Control System for severely physically handicapped) に関する



図3 リハビリ工学関連資料の一部

特集記事がある。様々な理由による四肢麻痺等による QOL 向上には今もなお研究開発が続いている課題について執筆された1988年の最新情報が掲載されている。また、同協会によるリハ工学カンファレンス講演論文集第3回(1988)~第15回(2000)も収められている。こちらも大学関係者や医学関係者、開発企業、さらには当時の養護学校教員等による研究発表が掲載されており興味深い。

(7) 支援技術・AAC

このカテゴリに分類した書籍・資料については、支援技術利用促進検討委員会編(2001)、支援技術を学ぶ: Introduction to assistive technology の第一章 障害とテクノロジー(総論) 第二章 生活を支援する技術(各論) 第三章 サポート(総論)があり、支援技術に関して体系的に整理され、学ぶことができる。また、電子情報技術産

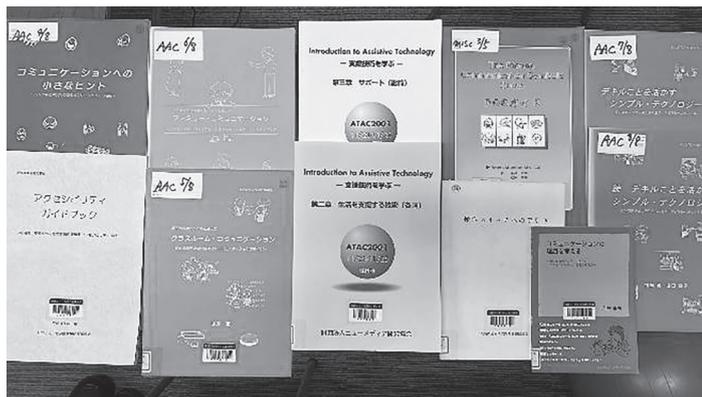


図4 支援技術関連資料の一部

業協会(2001)アクセシビリティガイドブック:利用者・支援者のための情報処理機器アクセシビリティ指針があり、こちらは経済産業省の委託事業の報告書で、情報処理機器のアクセシビリティ指針として取りまとめられたものであり、この時期にこうした指針が示されている。

また、

- ・中邑賢龍編著/石田とし子[ほか]著, コミュニケーションへの小さなヒント: シンボルと VOCA のコミュニケーションへの活用, 第2版, ころりソースブック出版会, 1999
 - ・坂井聡著, 電子機器やシンボルを使ったクラスルーム・コミュニケーション: 知的障害児や自閉症児とのコミュニケーションのポイント, ころりソースブック出版会, 1998
 - ・福島勇, デキルことを活かすシンプル・テクノロジー: 重い障害をもつ子供たちの遊び・学習活動へのヒント集, ころりソースブック出版会, 1997
 - ・福島勇, 塩田佳子, 続 デキルことを活かすシンプル・テクノロジー: 重い障害をもつ子供たちの遊び・学習活動へのヒント集, ころりソースブック出版会, 1998
 - ・高原淳一著, 自閉症や知的障害をもつ子ども達とのファミリー・コミュニケーション: 「ただいま」から「行ってきます」までのコミュニケーションアイデア, アクセシビリティ国際, 2000のように同様のサイズで見やすいタッチで編集されたわかりやすいガイドブックも公開されている。
- さらに、
- ・Roxanna M.Johnson/ 中邑朋子, 松原華子訳, PCS ガイド, アクセシビリティ国際, 1995のように、海外で出版され使用されている The Picture Communication Symbols Guide を日本語訳し、紹介している例もある。

(8) ATAC

本カテゴリは、本来 (7) と同じであるが、特にカンファレンス資料が多くあるため、別カテゴリとした。

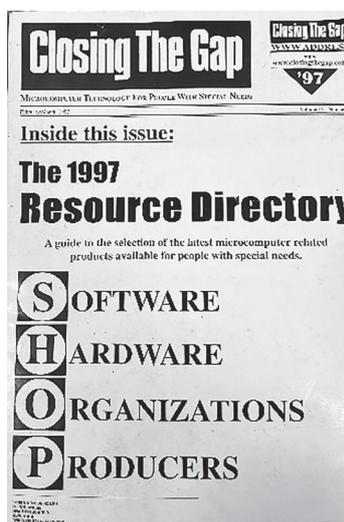


図6 The 1997 Resource Directory



図5 ATAC 関連資料の一部

96ATAC カンファレンスについて、開催趣旨として、ATAC カンファレンス実行委員は「ATAC は、障害を持つ人々が自立する上で重要なコミュニケーションの技術 (AAC) と工学的支援 (Assistive Technology)、そこにテクノロジーを利用する思想・哲学といった背景についても同時に学べる場になりたいと考えています。」^[4]と述べている。また、序章において、アメリカ合衆国の Closing the Gap (CTG) という団体から発行されている Resource Directory では、「様々なエイドが一覧表にまとめられ、機能や特徴が簡単に理解できる工夫がなされています。」^[4]とのことであり、毎年発行を目指すとして述べられている。松本文庫にはその一部が収められている。

(9) コンピュータ利用・情報教育

このカテゴリに分類した書籍・資料については、昭和 60 年代からコンピュータの教育利用の普及に伴い、教育現場での利用実態、教育実践に関する調査報告書、さらには、リソースブックといえるものがいくつか見られる。

- ・ IBM ウェルフェア・セミナー事務局, 障害者対応のコンピュータ・周辺 / 代替装置・ソフトウェア: 米国 IBM 障害者支援センター資料より IBM ウェルフェアセミナー報告集, 1988
- ・ コンピュータ教育開発センター編, コンピュータの教育利用事例集, 第 2 集, コンピュータ教育開発センター, 1988
- ・ コンピュータ教育開発センター編, コンピュータの教育利用事例集, 第 3 集, コンピュータ教育開発センター, 1989

障害のある子供たちにコンピュータ利用を如何に進めるか、障害のある子供に有用なソフトウェアを如何に普及させるかという目的からの報告書や一般図書もその理論的な裏付けとなる書籍が見られる。さらに、1994 年頃より研究報告書にもインターネットを活用した教育実践が見られる。

(10) マジカルトイボックス

このカテゴリに分類した書籍・資料については、東京都立養護学校の保護者や教員を中心に、アドバイザーに中邑賢龍氏、松本廣氏を迎えて、重



図7 マジカルトイボックス関連資料の一部

度の障害のある子供の指導支援を考える研究団体のイベント資料が中心である。会の設立趣旨として「障害が重い人でもコミュニケーションをしているはず。なんとかそれを豊かにできないだろうか?」と述べられている。具体的な教材・教具や支援機器の作成や活用についての具体的な資料が多く紹介されている。

(11) インターネット

このカテゴリに分類した書籍・資料については、平成6(1994)年以降に発行された研究成果報告書や教育実践研究の事例集、情報化推進リーダー養成研修テキストなどから、教育の情報化に関わる研究会や研修が多く行われていたことがわかる。また、こうした教育実践事例として紹介されている多くの事例は、Webを活用した調べ学習や情報発信などに加え、光ファイバー網の普及に伴いテレビ会議システムを使った共同学習の実践事例も見られた。

これらの資料の中で特に図8に示した

- ・佐藤尚武, 成田滋, 吉田昌義編, 教室からのインターネットと挑戦者たち: チャレンジキッズによる出会い・学び, 北大路書房, 1999

は、当時の研究実践報告で多く見られたインターネット上の一般に公開された場での学びや、対一の電子メールのやり取りを通じた相互作用からの学びではなく、一般の教室と同様に閉じられた空間での対多等の学びがあり、当時の特殊教育諸学校(聾・養護学校(肢体不自由・知的障害・病弱虚弱))や特殊学級などに在籍する27校の子供が、「インターネット上の『学びの共同体』チャレンジキッズ」のクラスメイトとして、日常の学習や生活からの学びを記録したものであった。現在も様々なトラブルが絶えないSNS利用などインターネット関連の相互作用による学習にとって、参考になると考えられる。

さらに、

- ・「特別支援教育におけるコミュニケーション支援」編集委員会(マジカルトイボックス・チャレンジキッズ研究会)編著, 「特別支援教育におけるコミュニケーション支援」: AACから情報教育まで, ジアース教育新社, 2005

は、特別支援教育におけるコミュニケーション支援について、第1章で概論、第2章おもちゃから広がるコミュニケーション、第3章シンボルやVOCAを利用したコミュニケーション、第4章コンピュータを活用したコミュニケーション、第5章コンピュータを使った学習支援について、第6章ネットワークを活用したコミュニケーション、第7章AACから情報教育までの目標チェックリストとして、2005年段階で、全国の研究会や研究報告書に研究発表を行っている教員や文部省関係者、研究者などが執筆しており、特別支援教育におけるコミュニケーション支援を網羅した内容となっている。

(12) その他

その他、障害全般、福祉、ノンカテゴリ、海外資料がある。主に一般書籍が多いため、OPAC検索

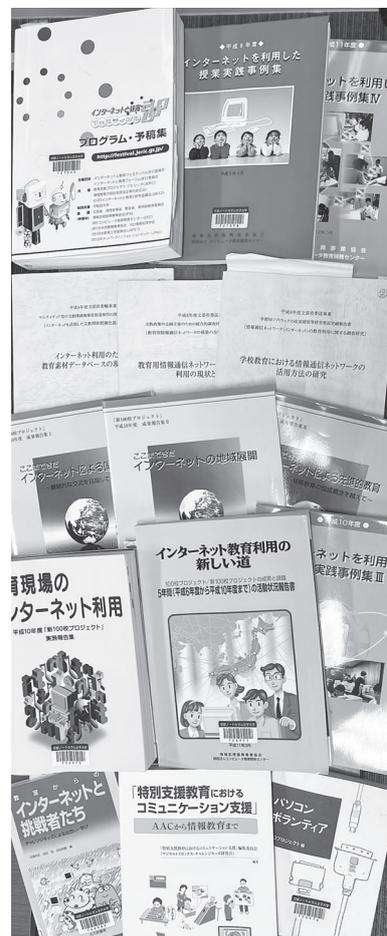


図8 インターネット関連資料の一部

にて参照いただきたい。また海外資料の紹介については今後の課題としたい。

4. まとめにかえて（太田）

ここまで、特別支援教育の国内の状況を紹介し、それをふまえて松本文庫所蔵の書籍・資料の概要を、図書館司書の立場から、特別支援教育研究の立場から整理した。

所蔵資料は、1976年から2007年までの資料が主で、現在は教材や教具として活用されることのない機器の活用や現在の取り組みに発展的につながる研究がみられる。例えば肢体不自由児に対する電動和文タイプライターの活用が見られたり、まばたきによるワープロ入力が見られたりするなど、直接つながっているかどうかは確認できないが現在の視線入力によるコンピュータ操作につながるものとして注目できる。さらには、2000年の前頃よりインターネットを活用した障害のある子供の教育実践も多く紹介されている。それらの中には現在の教育においても大切な情報モラルや情報社会に参画する態度を学ぶことができる実践研究も紹介されている。

今後、今後の課題としたこれらの取り組みなどの参考となった洋書資料の整理を含め、本学関係者だけでなく、特別支援教育に関わる重要な資料として活用されることを期待したい。

5. 参考文献

- [1] 文部科学省（2007）、特別支援教育の推進について（通知）、文部科学省、
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07050101/001.pdf（2023.2.21 確認）。
- [2] 文部科学省（2019）、特別支援学校学習指導要領等の改訂のポイント、文部科学省、
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afeldfile/2019/02/04/1399950_1.pdf（2023.2.21 確認）。
- [3] 文部科学省（2022）、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果（令和4年）について、文部科学省、
https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf（2023.2.21 確認）。
- [4] ATAC カンファレンス事務局編、ATAC カンファレンス資料集 '96、ATAC カンファレンス事務局、1996.

